

セゾン文化財団 創造環境イノベーション「スタートアップ」助成事業報告会

「地域課題に対して演劇ができること—アーティストと行政の連携による取組みの報告」

セゾン文化財団の助成プログラム「創造環境イノベーション」は、現代演劇・舞踊界の現在の問題点を明らかにし、解決を目指す事業を対象に公募している。この度、2016—18年度の3年間の助成期間を終了した「スタートアップ」事業の報告会およびディスカッションを実施した。2019年度は、**アートネットワーク・ジャパン「立川市南側エリア創客プロジェクト」**（東京都立川市）、**姜侖秀（カンユンス）「インターナショナル・シェアハウス・照ラス」**（岡山県真庭市）の二事業の報告を行った。それぞれ、アートNPOやアーティストが行政と連携し、演劇の手法を通じてコミュニティの活性化に取り組み、地域の人々の芸術への関心を高めている。両事業の報告を受け、有識者を交えたディスカッションにより、成果と課題を共有した。

共催：NPO 法人アートネットワーク・ジャパン、インターナショナル・シェアハウス・照ラス

日時：2019年7月5日（金）15:00—17:00

会場：セゾン文化財団 森下スタジオ

【第1部】

アートネットワーク・ジャパン「立川市南側エリア創客プロジェクト」報告

倉迫康史（Theatre Ort 主宰・演出／たちかわ創造舎チーフ・ディレクター）

たちかわ創造舎のチーフ・ディレクター業務を、NPO 法人アートネットワーク・ジャパン（ANJ）から委託されているが、フリーランスで劇団の演出家として活動している。たちかわ創造舎はオープンから3年半が過ぎたが、準備段階の5年前からANJと一緒にやってきている。僕はディレクターとして、主に事業の責任者として、マネージャーの陽は施設の経営の責任者として創造舎を運営している。



たちかわ創造舎

は2004年に廃校になった多摩川小学校を活用。立川市のはずれの多摩川沿いに位置し、立川駅からバスで約10分、アクセスはあまりよくない。サイクリングロード沿いなので自転車

でのアクセスはしやすい。最寄りのバス停が団地西であるように、団地群に囲まれた小学校。団地に子どもが多かった時代に作られ、団地の少子化とともに廃校になった学校である。この中で4つの事業、「インキュベーション・センター事業」「フィルムコミッション事業」「サイクル・ステーション事業」「コミュニティ・デザイン事業」を行っている。「インキュベーション・センター事業」は起業や創業の支援。IT等ではなく、文化芸術系のアーティストや団体を支援していくという方向だ。現在、3つの劇団とチョークアーティストがシェア・オフィス・メンバーとなっている。「フィルムコミッション事業」は主に校舎の2階を撮影専用スペースを、映画、ドラマ、CM等の撮影に提供している。「サイクル・ステーション事業」は立川市が自転車文化都市を目指していることから、1階でスポーツサイクル系の事業を行っている。以上の3つの事業は立川市が設定した事業。セブン文化財団の助成を受けた「立川市南側エリア創客プロジェクト」は4つめの事業の「コミュニティ・デザイン事業」に位置づけられている。人と人とのつながりを生み出す「もの」と「体験」と「語り合い」を創出することを目的に行っている。主な事業は「ほうかごシアター」で、月に1回、平日の夕方にたちかわ創造舎の元音楽室を使って誰でも楽しめるお芝居の上演を行っている。「コミュニケーション・スクール」は演劇的な手法を活用したコミュニケーションの技術を一般の方たちに伝授するプログラム。子供とのコミュニケーションを深める「音読講座」、英会話を演劇で学ぶ「ふれいご」、ビジネスパーソン対象のプレゼンテーション講座等を行っている。

「ほうかごシアター」は、たちかわ創造舎のプロジェクトパートナーであり、私が主宰の Theatre Ort(シアター・オルト)による「よみしばい」というスタイルの演劇を行っている。「よみしばい」は児童文学の名作を原作に、25分くらいの作品に仕上げている。必ず観客参加のシーンがあり、衣裳は凝るが、どこでも上演できる。



『ハーメルンの笛吹き男』

現在、「ほうかごシアター」の演目はレパートリーとして20作品がある。助成金により、大人400円、

子供200円という低料金で実施できた。大人だけが買える回数券は1200円分を1000円で買え、「あしながチケット」として子供たちにプレゼントできる。200円分だけプレゼントしてもいいし、全部をプレゼントしてもいい。現在600人以上の子供が無料で観劇している。「ほうかごシアター」で作った「よみしばい」は出張公演という形で様々な場所で上演している。立川市では市民のニーズに応え、昨年度から夏休みも学童施設を開放して子どもたちを預かる柴崎サマー学童から、夏休みの思い出作りも含めて演劇を上演したいということで声がかかった。たちかわ創造舎の近くにある富士見児童館でも実施。このような上演は非常に多く、先日も国立の団地の中で自主的に運営されている「風の子」という保育施設で実施。隣の日野市の野外保育サークルからの依頼で野外劇としても上演。毎年、夏休みには団地の集会室で上演。多摩川図書館など、場所を選ばずに上演を行っている。多摩エリアの公共ホールとのコラボレーション企画としては、くにたち市民芸術小ホール、吉祥寺シアターでの公演を行っている。くにたち市民芸術小ホールでは「1 2 3 & ◎ (にじゅうまる)シアター」を実施。1 2 3 シアターは3歳児以下のお子様を連れただのお客様向け、◎シアターは二重丸のようにだんだん場が広がっていくというイメージで、それ以外の方を対象にしたものを、同じ日に2公演行う。吉祥寺シアターでは「吉祥寺ファミリーシアター」を行っている。3日間のうちの2日間で「よみしばい」を行う他、劇場で「あそぶ」プログラム、劇場で「つくる」プログラムとしてワークショップを行い、その成果として、最終日の「青い鳥」公演の中で、子供たちがダンスを踊るシーンが、子供たちが作った舞台美術を使って行われた。連日満席で非常に好評だった企画だ。「吉祥寺ファミリーシアター」は立川でやっていた子供たちに向けたプロジェクトを参考にして始め、今は独自の企画に育ちつつあり、良い形で展開している。

「コミュニケーション・スクール」は俳優や演出家の技術を日常生活で生かしてもらおうもので、英語を学ぶワークショップの「ぶれいご」、「音読講座」などがある。「音読講座」は、小学生は音読の宿題が出るので、親子のコミュニケーションとして豊かな時間に変えることを目指して始めた講座。3月の平日に2-3回連続で、定員15-20人でやっているが、毎回満席でニーズの高い企画だ。「ぶれいご」は立川市を拠点とする「MY COMPLEX」という演劇ユニットが担当した。「MY COMPLEX」は毎年エディンバラ・フェスティバル・フリンジで1人芝居を英語で上演しており、今年度から活動拠点をエディンバラに移した。「ぶれいご」は都心ではビジネスパーソンが集まって成功したが、立川では男性の受講者はほとんどおらず、女性で英語を学びたい人、演劇ワークショップの代わりに受講したい人が多く、高い料金は設定できず、集客も苦勞し、都心との違いを感じた。

「立川シアタープロジェクト」は2016年に発足した、立川市、立川市地域文化振興財団と3者で演劇を発信するプロジェクトで、人材育成も目的とした実行委員会形式で運営している。立川で演劇作品を創造し、たましん RISURU ホール(多摩信用金庫のネーミングライツによる立川市市民会館、客席1000人超)で上演。主な事業は「子どもとおとながいっしょに楽しむ舞台」で、クリスマスに親子で大きなホールでお芝居を見せよう。これまでに3回実施し、1年目の『アラビアンナイト』は翌1月に吉祥寺シアターでも上演した。2年目は『西遊記』、3年目は『ドリトル先生と動物たち、月へゆく』を上演。



『ドリトル先生と動物たち、月へゆく』

「子どもとおとながいっしょに楽しむ舞台」にどれだけ人を呼べるかを、「立川市南側エリア創客プロジェクト」の成否の指針としていた。1年目は2回公演で動員目標が800人だったが、実際は1358名が来場し、かなり驚き、それだけのニーズがあったことがわかった。2年目は3回公演で1544名が来場。自由席のため、とても早くから多くの観客が並んでいたため、3年目は指定席にし、1600～1700名の動員を目指していたが、当日券が伸びず1466名が来場。みんなで行って並んで見たいのに指定席だとそれができない、当日券だといいい席がないと思われた、などの理由が考えられる。セゾン文化財団に支援してもらっていた「ほかごシアター」の延長で、昨年度からたましんRISURUホールのあちこちでお芝居を楽しんでもらう企画をスタートした。このホールは一般的な市民文化会館で、演劇の敷居が高いと思われることが課題だったので、場所に親しみを持ってもらうため、劇場ではなく館内のあちこちでお芝居を3回上演した。地下展示室、1階ロビーなどを劇場として上演し、大ホールのホワイエでも上演の予定だ。もう1つ、昨年度から始めたのが、「子ども未来エンゲキ部」という演劇ワークショップ。クリスマスの演劇を見た子供たちから自分もやりたいとの声上がり、立川市子ども未来センターで実施。「子どもたちの未来のために、演劇の未来のために」という想いを込めて名付けた。子ども未来センターはたましんRISURUホールに隣接し、元々立川市役所だった。立川市は今、北側の大开発が進んでいる。基地の町だったが、返還されて、北側に市役所など公的な施設を集めた。南側では文化施設を盛り上げようと作ったのが子ども未来センター。立川市はたましんRISURUホールと子ども未来センターを一体活用して文化の拠点として盛り上げたいと考えている。「子ども未来エンゲキ部」は、立川市発信で動員数もある「子どもとおとながいっしょに楽しむ舞台」の関連企画として、未来センターでも何かやっ払いこうと始めた企画だ。10人ぐらいを想定していたが、12人集まり、全5回行って、10分ぐらいの作品を作って発表した。

その他にもたちかわ創造舎は様々な団体と手を組んで活動を行っている。「DANCHI ART FES」は、富士見町住宅自治会と富士見町団地管理組合の企画。「ファーレ立川アートミュージアムデー」は立川の北側に 109 個ある、北川フラムさんが手掛けたパブリックアートを盛り上げるためのイベントで野外劇を上演した。「たちボタ」は立川商工会議所と組んだ自転車での散歩イベントで、観光につなげようとしている。サイクルスポーツの選手が参加者を誘導し、俳優がガイドをする。立川市ごみ対策課からは「環境フェア」でごみについての作品を依頼された。

これまでの事業パートナーのインタビューを紹介する。

公益財団法人立川市地域文化振興財団 事務局次長 足立香織さん

財団が持っていた課題：音楽、演劇、歌舞伎などの事業を展開してきていたが、演劇は弱かった。たましん RISURU ホールの小ホール、大ホールが演劇向きではなかった。演劇を中心とした活動をするたちかわ創造舎ができたので、立川の演劇文化の創造を協働できるのではないかと考えた。たちかわ創造舎は、「よみしばい」「あちこちシアター」のような草の根的な活動も行いつつ、「立川シアタープロジェクト」のような大きなお芝居も創造することがわかった。たちかわ創造舎で創作したお芝居の発表の場をたましん RISURU ホールとして連携していければ、立川でよいものができるのではないかと考えている。

立川シアタープロジェクトの成果：今までの大ホールでの公演は、売れている役者のネームバリューでチケットを買ってくれる観客が多かったが、たちかわ創造舎の草の根的な事業を通じて、「子どもとおとながいっしょに楽しむ舞台」で 1500 名を集客できるのは素晴らしいことだし、立川で演劇を創造して発信できるのは、立川の演劇文化にとって有意義なこと。

今後の発展の可能性：演劇は新宿、池袋で上演されているイメージがあるが、立川は演劇が面白いという評判が広まれば、立川のシティー・プロモーションにもなり、若い人が目を向けてくれるようになるのではないかと。

これからの課題：今作っている「立川シアタープロジェクト」のお芝居が東京をはじめ、全国に発信できるようになっていくと面白い。若手をたちかわ創造舎とともに審査し、1 年間、創造の場としてたちかわ創造舎、発表の場としてたましん RISURU ホールを提供し、そこで育った劇団を全国に発信するような広がりがあると面白い。

吉祥寺シアター 制作 大川智史さん

吉祥寺シアターの課題：地域における認知度、地域の利用者、来館者が少ないこと。

事業を実施しての手応え：課題に加え、子供や乳幼児の保護者が来場しにくいこともあったので、子供向けの事業を一緒に行った。地域の児童館のような子育て施設や図書館でアウトリーチを行うと好意的な反応があり、市民が求めていることを痛感した。それもあって「吉祥寺ファミリーシアター」をたちかわ創造舎とともに年に 1 度、地域の人、子育て世代に向けて開催している。これが 3 年くらい協働して結実したものだと考える。

市民からの声：地域への誇りを持っている人が多いので、地元で子供と演劇を楽しめることに好意的で、武蔵野市ならではの、吉祥寺ならではのと言われる。

協働の成果：吉祥寺の中でいろいろなつながりが生まれた。子供向け事業を出張上演することで、図書館、子育て施設など、それぞれの施設が抱える課題、悩みを共有でき、事業が求められていることも感じた。

今後の展望：たちかわ創造舎が吉祥寺で新しいことができるか、新しい発見、出会いがあるかを考えていきたい。オリジナリティーを出し、付加価値をつけるために、吉祥寺シアターでたちかわ創造舎のアーティストと別のアーティストが会って発見や化学反応が生まれるといい。その出会いが立川に持ち帰られる、吉祥寺からたちかわへのベクトルができてくると、より広がりのある協働になる。

姜侖秀(カンユンス)「インターナショナル・シェアハウス・照ラス」報告

姜侖秀(インターナショナル・シェアハウス・照ラス代表)

自身は韓国人で、6年前に来日した。その前はイギリスに2年間滞在し、演劇を学んだり創作していた。インプロビゼーションをベースにして、6か国の友達9人と作った作品を、英国内や韓国で上演した。妻が日本人で、出産のために2014年に日本に里帰りした時、千葉県の子原市の国際芸術祭「ICHIHARA ART MIX 2014」の募集広告を見て、応募したら採択された。インプロビゼーションの基本は「Yes and」だと思う。相手の提案を受け入れ、自分も提案することを繰り返して物語が進んでいく。「ICHIHARA ART MIX 2014」で提案した『いちはら人生劇場』は白鳥(しらとり)小学校という廃校を活用した作品で、1年間、住民のインタビューをし、それをもとに物語を作った。この作品は真庭市での活動にも通じている。学校にお化けたちが住んでいるという設定で、かつて生徒がいた頃、お化けたちはその話を聞いていて、夜な夜な演劇化して楽しんでいたのに、廃校にな



って誰も来なくなったので、何とか人を呼び込んで、その人たちの話で演劇を楽しむという物語。学校に入ると放送でお化けたちが誘う声が聞こえる。いろんなものの中にスピーカーが入っていてインタビューが聞こえるようになっている。インタビューした人からもらったもので、例えば陸上部の話は

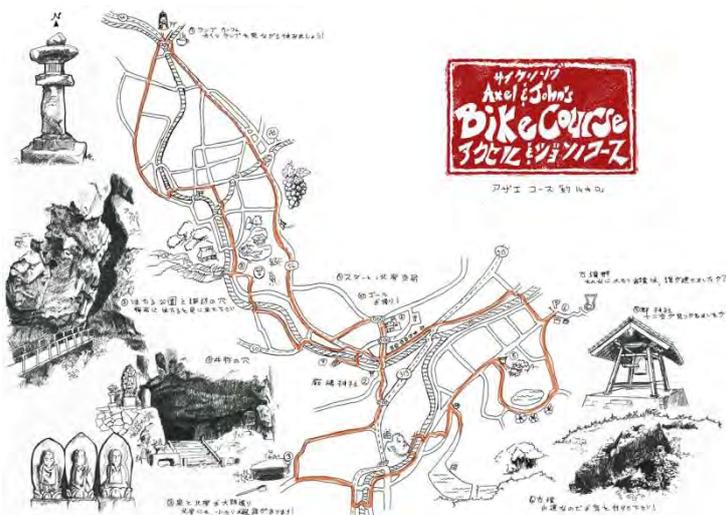
運動靴から聞こえてくる。小道具部屋、衣装室などを通り、鏡に映しながら遊べる空間になっている。廊下に出ると、鏡がマジックミラーになっていて、外の人の中の人を見ているという設定。最後の放送室に入ると、台本があって、次の人を驚かすという作品。一般的な劇場公演とは異なるが、自分では演劇だと思っている。「Immersive Theatre」*は観客をどういう形で物語に参加させるかを考える。

「インターナショナル・シェアハウス・照ラス」



これをやってから日本の地方が持つ力に可能性を感じ、芸術祭だけではなく、日常的にできる場はないかと探しているうちに、地域おこし協力隊制度を知った。岡山県真庭市は、県北の地域で東京の1.2倍の面積がある。

里山資本主義など、まちづくりの世界ではよく知られている。真庭市の地域おこし協力隊は、市の要望に沿うのではなく、隊員の提案に市も関心があれば、実行できた。アーティスト・イン・レジデンスをしながら創作活動のできる場作りを提案したら受け入れられた。そこから始まったのが「インターナショナル・シェアハウス・照ラス」。空き家を改修した後、アーティスト・イン・レジデンスをどうすれば持続可能になるのかを考え、7人宿泊可能な家で、6人から家賃をもらえば、アーティスト1人は無料で滞在できると発想した。もう1つやりたかったのは、滞在するアーティストに地域の学校等との連携で創作活動をしたり、教育活動に関わってもらうこと。構想段階でセゾン文化財団の創造環境イノベーションの助成を受けることになった。それがシードマネーになり、真庭市も積極的に関わるようになった。ちょうどその頃、総務省「ふるさと納税を活用したクラウドファンディング」が始まり、真庭市の推薦によって3つのモデルケースの1つに選ばれ、目標額の300万円を超える400万円が近く集まって、シェアハウスをオープンできた。



シェアハウスの滞在者で、フランスと日本を2年半かけて自転車で往復した自転車の専門家、かつ本業は国家公務員で道路を設計しているフランス人にサイクリングコースを作ってくれないかと提案し、アメリカ人のイラストレーターとともにサイクリングコースの地図を作ってもらった。3つのコースができ、「外国人が案内する日本の田舎サイクリング」という

名前が、真庭市でイベントをしたり、シェアハウスの利用者に案内している。このおかげで岡山県の

自転車関係者の集まりに出席したり、取材を受けた。その後もピザ窯作りや農業体験、中学生とのワークショップ等につながっている。真庭市の中でも旧北房町の平均年齢 80 歳以上(正確的な数値は分からないが私が感じるのが80歳くらい)の小さな集落にあるシェアハウスで、国際交流をしようと言っても誰も来ないが、コスタリカ料理を食べるといってみんな来る。地域には梨の農家があり、梨の規格外品が多くあると聞いて、韓国では梨をすりおろして入れたキムチは高級品だと話したら、お母さんたちが作り方を学びたいと言い始めた。ちょうどその時、韓国の食文化で有名な全羅南道(チョルナムド)の知事が真庭市のバイオマスを視察に来ていたので、キムチづくりの先生の紹介を依頼し、韓国に 30 人しかいない調理名人に来てもらった。



お母さんたちがワークショップを繰り返すうちにキムチ作りが広がり、2年間ぐらい続いて、商品化することになり、自分が会社を作って販売することになった。食べ物を通じて人が集まるので、シェアハウスに滞在する人が自国の料理を出すレストランがいいのではないかとということになり、レストランを借りて、去年の 11 月から「TABIBITO SHOKUDO」を始め、住民との交流が深まった。

当初はシェアハウスに来るアーティストが子供の教育に関わるのが夢で、学校などに働きかけたが、依頼は英語教室と料理教室が多かった。夏休みに「英語で話そう」と名前を変えて演劇ワークショップもやった。2018 年度にギリシャ人で immersive theatre を手掛ける演出家を招待し、ワークショップを行ったが、高校生の参加者はゼロ、一般の参加者もかなり少なかった。告知の方法がよくなかったのかもしれない。「オデッセイ」というギリシャ神話を現代に移したらどうなるか、原作の森に入る



2018 年度にギリシャ人で immersive theatre を手掛ける演出家を招待し、ワークショップを行ったが、高校生の参加者はゼロ、一般の参加者もかなり少なかった。告知の方法がよくなかったのかもしれない。「オデッセイ」というギリシャ神話を現代に移したらどうなるか、原作の森に入る

2018 年度にギリシャ人で immersive theatre を手掛ける演出家を招待し、ワークショップを行ったが、高校生の参加者はゼロ、一般の参加者もかなり少なかった。告知の方法がよくなかったのかもしれない。「オデッセイ」というギリシャ神話を現代に移したらどうなるか、原作の森に入る

シーンを真庭の森に移し替えて、30分くらいの作品を作った。



これまでの活動のキーワードは「主体性」。自分はソウルで生まれ育った都会っ子だが、真庭のような地域の人たちは地域への関りが都会より深い。アーティスト・イン・レジデンスも、

もっと関わっている人たちが主体性を持って入ってこられるようにしていきたい。3年間で振り返ると、最初は自分1人だけと感じていて、なかなかうまくいかず、試行錯誤してきたが、3年経って、シェアハウスの管理担当者、「TABIBITO SHOKUDO」の運営担当者、キムチの製造担当者が見つかり、岡山県北のアーティストたちとのつながりもできて、一緒に映画製作も行っている。山崎樹一郎監督の新作映画に俳優としてかかわることにもなった。岡山市の旭小学校で演劇ワークショップを実施できた。今までは無理をして頑張っていたが、3年経って、自然につながりができるようになった。現在、美容院だった場所を、真庭出身の女優がギャラリーに改装して創作活動をしようとしていて、映画で知り合った仲間たち、シェアハウスの滞在アーティストも加わる作品を展開予定。物語は journey (旅) と同じで、始まったらどこに向かうかわからない楽しさもある。主体性をもちながらも旅を楽しみたい。

* Immersive Theatre

イマーシブ・シアターはステージを取り除き、観客をパフォーマンス自体に浸らせて没頭させる (immerse) ことで伝統的なシアターと区別される。多くの場合、特定な空間を使うサイトスペシフィックなどの形式で作られていて、観客が俳優や周辺環境とインタラクションすることで俳優と観客を隔てる「第4の壁」を壊す結果になる (wikipedia を参照)。代表的な劇団はイギリスの Punchdrunk や shunt などがあり、最近では観客が Star Wars や Blade Runner など有名映画の登場人物になり、物語を経験させる「Secret Cinema」が注目されている。

(掲載写真の撮影は全て International Share house TERASU)

【第2部】

ディスカッション: 倉迫康史、陽茂弥、姜侖秀(カンユンス)、中村陽一

司会: 中村陽一(立教大学 21 世紀社会デザイン研究科教授・社会デザイン研究所所長)

陽茂弥(NPO 法人アートネットワーク・ジャパン理事/たちかわ創造舎チーフ・マネージャー)



中村陽一氏

中村: 立教大学 21 世紀社会デザイン研究科は社会人がたくさん来ている大学院で、2002 年にできて 18 年目に入っている。20 代から 70 代までのビジネスマン、ビジネスウーマン、NPO や地域での活動を行っている人、政府・行政スタッフ、マスメディア関係者、アーティスト、文化政策に関心のある人、アーツマネジメントに携わっている人などが学んでいる。私自身は、かつては民間在野で NPO や市民活動を専門にしており、最近はソーシャルビジネス、コミュニティービジネスにスタンスを移しながら、文化政策やアート系の動きと社会デザインをつなぐ活動も行っている。

セゾン文化財団の助成プログラム、創造環境イノベーションには課題解決とスタートアップがあり、今日の報告会はスタートアップについて。どちらも課題解決型の事業が目指されている。**先ほどの報告へのお互いの感想**から伺いたい。

倉迫: カンさんの話に非常に共感した。やってきたこと、生じる問題は似ていると思った。立川は多摩エリアで、東京の 23 区とは全く異なり、多摩だけで 30 市町村あって 400 万人ぐらいの人口がある。高校生がワークショップに来ないとか、人々が食べ物のイベントには来るのはよくわかる。さっき報告した団地フェスティバルにはパフォーマンスもあるが、食べ物が大事だった。団地の高齢者が買いに行けない立川の名物を並べると、聞いたことはあるが食べたことがないものを買ってくる。やっていることがアートから離れるだけではなく、アーティスト以外の人たちとの付き合いが重要なことも同じであることを聞いて勇気づけられた。

カン: 倉迫さんは、自分のやっていることに先行しているように感じた。満席になったという報告が何回かあってうらやましかった。一番苦勞するのは宣伝。真庭は広いが人口が少なく、情報を届けるのが難しい。チラシを配布したり、若い人とは SNS でつながったりしても、情報が行き届かないが、どのように宣伝しているのか。

倉迫: 地域で活動していて情報を届けにくいのが若者世代。お母さん、子供、高齢者は、市がバックアップしてくれる市報、学校、児童館等の公共施設へのチラシ配布が一番大きな広告媒体になっている。SNS を見て来る人は少ない。地域に密着した情報を市民がどこで手に入れているのか。ハイアートをやる時は大変だと思う。生活に密着した演劇的な催しを提供しているので、生活圏の中に情報を届ける必要がある。

中村: 劇場でも観客創造の特効薬は見つかっていないが、「創客プロジェクト」に込められた狙い、意図、ビジョンはあるのか。

倉迫: 演劇を見に行きたくない人を行こうという気にさせるのは難しい。いろいろなジャンルを知っていて、映画、ゲームを選んでいる人に演劇を薦めても来てくれない。それより来たいけど来られない人、例えば子供がいる、障害があるなどの理由で来られない人に来てもらえるようにし、演劇を見ることを考えたことがない人に選択肢として提供することが大事。

中村: 3 年間の取組みの前後での変化は？現在、ソーシャルインパクトが注目されているが、インパクトは何か？



カン: ハードウェアではなくコンテンツ作りが中心のつもりで、ハード面は宿泊できる場所を作ればいいと思っていた。他地域から学生が映像製作で滞在する時などにも、宿泊してもらえるように、宿泊施設の許可を得るために改装工事を行い、最近では映画製作の人たちが宿泊するなどしている。助成金によって改装が実現した。

左から姜侖秀氏、倉迫康史氏、陽茂弥氏

アーティストが滞在して、学校と連携して事業を行うことはスムーズにできると思っていたが、思ったように進まなかった。3 年間でネットワークができ、創作のために集まれる場所ができた。県北で活動するアーティストたちが集まる場所になった。自身が外国人で、真庭で一から活動を始めたので時間がかかったが、創作の際に声を掛けられる仲間ができた。創作ネットワークの選択肢の 1 つができたことは評価できるのではないかな。

中村:文化芸術という特別なことを特別な場所でやるかのように思われてしまうこともあるが、そうではなく、場所、場、ネットワークができて、それが地域の日常の中でアート、文化的なものに関わってみたい、接したい人に応える場になっている。

陽:「立川シアタープロジェクト」は、演劇の観客を立川および多摩地域で増やしていくことが目的だった。その過程として「ほうかごシアター」「コミュニケーション・スクール」等を実施。特に「ほうかごシアター」はたちかわ創造舎の看板事業に育った。小さな教室で行う公演だが、毎回 50 人くらい、多い時はそれ以上が来場する。ほぼ全員の子供が無料で見られるくらい、「あしながチケット」も大人が買ってくれている。12 月の公演は、立川市地域文化振興財団 足立さんのインタビューにもあったように、アイドル、有名俳優、有名演出家の公演ではないにもかかわらず、1500 名もの観客が来場しており、地域の子供たちが「ほうかごシアター」の俳優のファンになっている。地道な活動が創客につながっている。

倉迫:地道な活動を行っている。豊島区のにしすがも創造舎で活動していた時の問題意識は、常に社会や国の文化政策についてだったが、市町村の地域課題は社会問題ではなく、生活問題。例えば、ごみの分別は社会問題だが、分別のためのごみ箱を置くスペースが家がないのが生活問題。生活の障害をどうやって取り除いていかに視点が移り変わっていったことが 3 年間の 1 番大きな変化。地域でおみこしを担ぐ、地域の議員の活動報告会に出席するなど、市民の生活に溶け込んでいく。その中で、人々はなぜ演劇を見に行く余裕がないのか、演劇に行くという選択肢がないのかを発見していかなければいけない。何千人を集める芝居は都心にあるが、立川でやっているのは何十人をどう集めるかということで、顔が見える何十人。

中村:ソーシャルビジネスとも共通している。先日、日本初のソーシャルビジネス白書のお披露目の会を行い、これまでとこれからの変化について話した。これまで、ソーシャルビジネスは社会的企業ともいうので、課題解決、ソーシャルインクルージョンなど、大文字に近い語り口になっていたが、実際は個別具体的で、地道なところに事業分野が展開しており、ここ 10 年位の間に、(東日本大震災が発生したこともあって)大きく変化している。地域での活動は、実施する側の視点の変化も含めて起こってくる。

会場からの質問:青年団は豊岡に移転しようとしている。地域の人とタウンミーティングを開くなど、コミュニケーションを取ろうとしている。宣伝方法も探っている。移住する江原では防災無線と回覧板が高齢者には有効だと聞いている。**ローカルなメディアの使い方**を聞きたい。

カン:回覧板を使ったこともあるが、前もって準備しなければならない。突発的なイベントでは使いにくい。真庭市は MIT というケーブルテレビがあり、視聴率が 60% 近いが、事前に取材依頼が必要。LINE グループを作ったり、フェイスブックやチラシで告知しても集まる人の顔ぶれが同じ。今まで来

ていない人たちにアプローチしたい。今一緒に活動しているのは 40 代の男性ばかりなので、今までに関わりのない 20 代の女性と話す会を企画している。

倉迫:防災無線はたちかわ創造舎の屋上にも設置されているが使ったことはない。市報等には情報を出している。イベント会場付近の住戸にチラシ配布は行う。立川食べ歩き隊という FB グループがあり、700 人ぐらいが登録している。そこにまちづくりに興味のある人が集まっていて、そこに行くのと飲食しながらイベント情報が口コミで伝わる。

中村:高度成長時代の邦画では、町内や村の有線放送で地域の店などの宣伝が流される場面があった。土地の言葉で話されているのが面白かった。今やると、SNS より狙ったインパクトがあることがあるのではないか。SNS と組み合わせることで広がる可能性がある。地域のネットワーカーとも知り合うべき。

中村:真庭は地方の町で、立川も地方都市の規模。姜さんが挙げた「主体性」は大事。**住民 1 人 1 人が運営主体としてかかわることができる場づくり、ネットワークづくりにおいて今後できることは？**これまでの舞台芸術は当事者性が強く言われる世界だったと思うが、第 3 者、非当事者、傍観者をつなぐ人が出てくると活気が出てくる。そこに向けての工夫は？

倉迫:ほうかごシアターの次のフェーズでは、ほうかごシアターの運営に市民に参加してもらおう。今年の 7 月末にファンミーティングと称して意見交換会を行う。セゾン文化財団の助成が終了し、ファンドレイズが大きな問題になる。これからの市民社会で寄付をどう集めていくのか、協賛をどうしていくのか。メセナ的な大きなものではなく、第 1 歩としてあしながチケットで小さい寄付に慣れてもらったところからスタートした。ほうかごシアターは私たちの事業だと思ってもらおう仕掛けを作っていく。常連の観客に関わってもらい、口コミで広めてもらう。広報、営業を兼ねてもらおう。レパトリーが 20 作品あるので、来年度の演目を人気投票で決める。来年の 1 月まで投票を受け付け、上位作品を来年度のほうかごシアターの演目としてラインナップすることで、私たちが選んだ演目だと思ってもらえる。作品のクオリティーはアーティスト側が担保し、運営は市民に参加してもらおう仕組みを今年度で作りたい。

陽:ほうかごシアターは多摩エリアの他の市町村でも出張公演をやってきたように、機動力の高さが特徴。様々なところに届けられることで地域のプライドにもなるといい。立川シアタープロジェクトも含め、立川には演劇があるということが地域のプライドにつながるといい。

カン:真庭フィルムユニオン(MFU)を作ったのは、作った作品を海外での一般上映につなげるため。作品創作にはかかわっていない市民が、海外での上演を実現し、現地で共に見ようとしている。その他、元幼稚園だった場所をキムチづくりの加工所とオフィス、TABIBITO SHOKUDO、アーティ

ストの創作、発表の場としている。当初、演劇に触れたことのない人をターゲットに活動していて、演劇に関心のある人は自然に集まると思っていたが、そうではなかった。一方でキムチと一緒に作っているお母さんが映画にも関心を持ってくれる。入り口は人それぞれで、お互いに交差するようになる。クロスするような場を作っていきたい。

中村: 杉並区の座・高円寺と東京芸術劇場の運営に関わっている。たとえば、座・高円寺の場合、地方自治法の定める公共施設として、館内のスペースを誰かが占有することにはハードルがあるが、阿波踊りホールがあることで専有に地域性を持たせている。また劇場創造アカデミーという舞台芸術関係者が育つ場を作っていることで専有にある種の根拠を持たせている。また、東京都美術館の「とびらプロジェクト」では「とびラー(アート・コミュニケーター)」が東京都美術館の活用に関わっているように、劇場でも同様のことができないかと、東京芸術劇場ではシアター・コーディネーター養成講座が試験的に始まっている。ロジカルな認知能力と感覚的・感性的な非認知能力の両方を持って地域と交わる人が出てくるといいと考えている。昨今の法改正もあり、地域性と芸術文化性が対立構造でとらえられることもときにあるが、相互乗り入れで豊かになっていくことが大事。今日の報告はそこに向けてのヒントがいろいろある事例だった。スタートアップ支援の事業が課題解決支援への種を蒔いているように感じた。